

**深刻化する福島第一原発の汚染水  
早急に実態を把握し公表せよ、海への放出に反対する  
原発の再稼働審査より汚染水対策を優先せよ**

2014. 2. 19 美浜の会

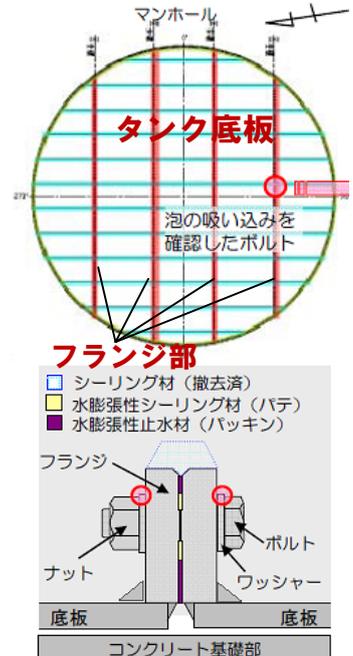
**1. タンクからの新たな漏えい**

昨年8月19日に福島第一原発のH4エリアのNo.5タンクから300トンの汚染水が漏えいした。その中のストロンチウム90は、広島原爆がまき散らした量の約半分、3.11事故時の放出量の約5分の1に相当していた（下記URLにあるリーフレット参照）。

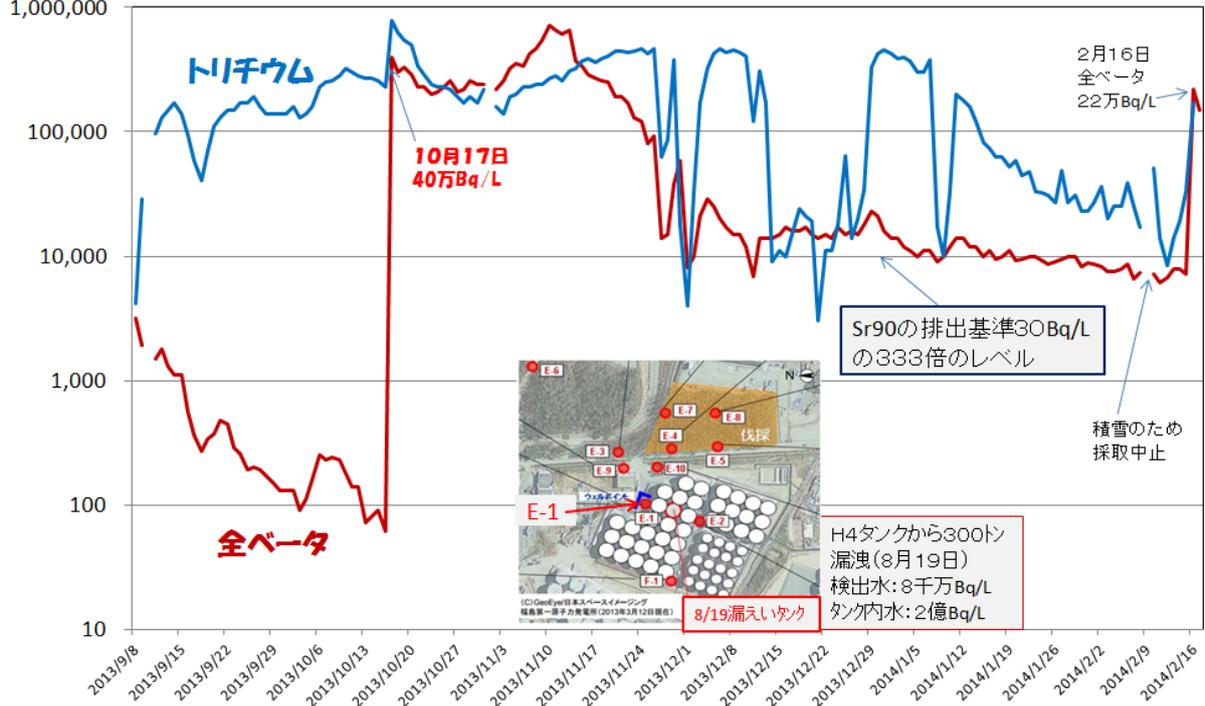
[http://www.jca.apc.org/mihama/fukushima/leaf\\_201309.pdf](http://www.jca.apc.org/mihama/fukushima/leaf_201309.pdf)

漏えいした原因は、フランジ型タンクの構造にあった（右図）。底部でもパッキンを挟んでネジ止めしていたため、水圧でパッキンが押され、はみ出して隙間が数カ所に生じたためであった。このタンクと隣の2つのタンクは水抜きしたものの、同様の構造・条件にあるフランジ型タンクは310基ある。漏えいが起こらないはずはない。

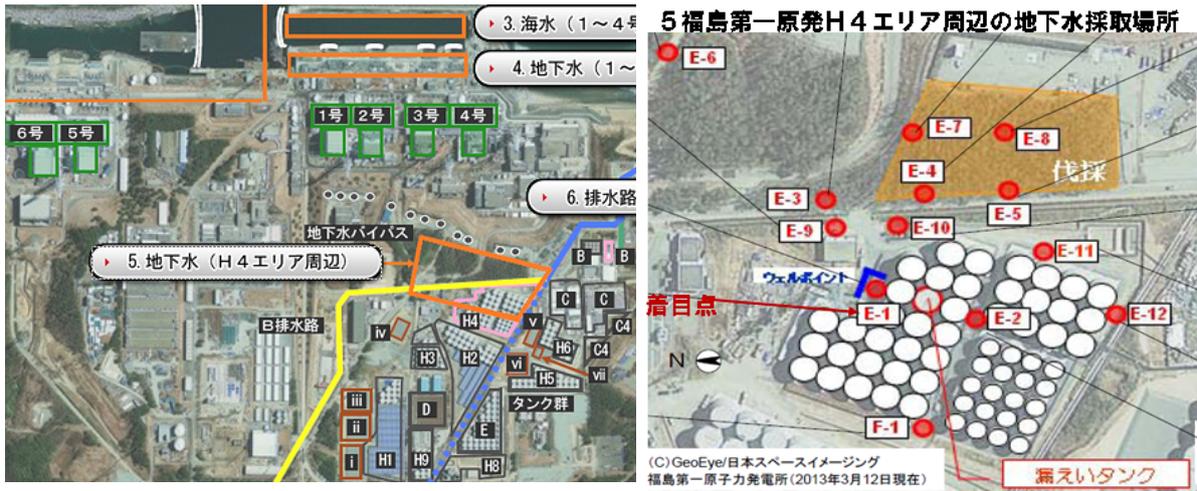
そのため、漏えいしたNo.5タンクの近くに観測用井戸E-1を設け（地下7m）9月初めから観測を始めたところ、10月上旬にかけては全ベータの濃度は低下気味で100Bq/Lを切るまでに下がっていた。ところが10月17日に突然40万に跳ね上がった（下記グラフ）。その後11月半ばに低下し始めたが、12月から横ばいで今年になっても1万のレベルを維持していたが、2月16日に突然22万に跳ね上がった。



**福島第一原発H4タンク近傍E-1孔地下水：全ベータ及びトリチウム濃度の推移**



（データ出所：<http://www.tepco.co.jp/nu/fukushima-np/fl1/smp/index-j.html>）

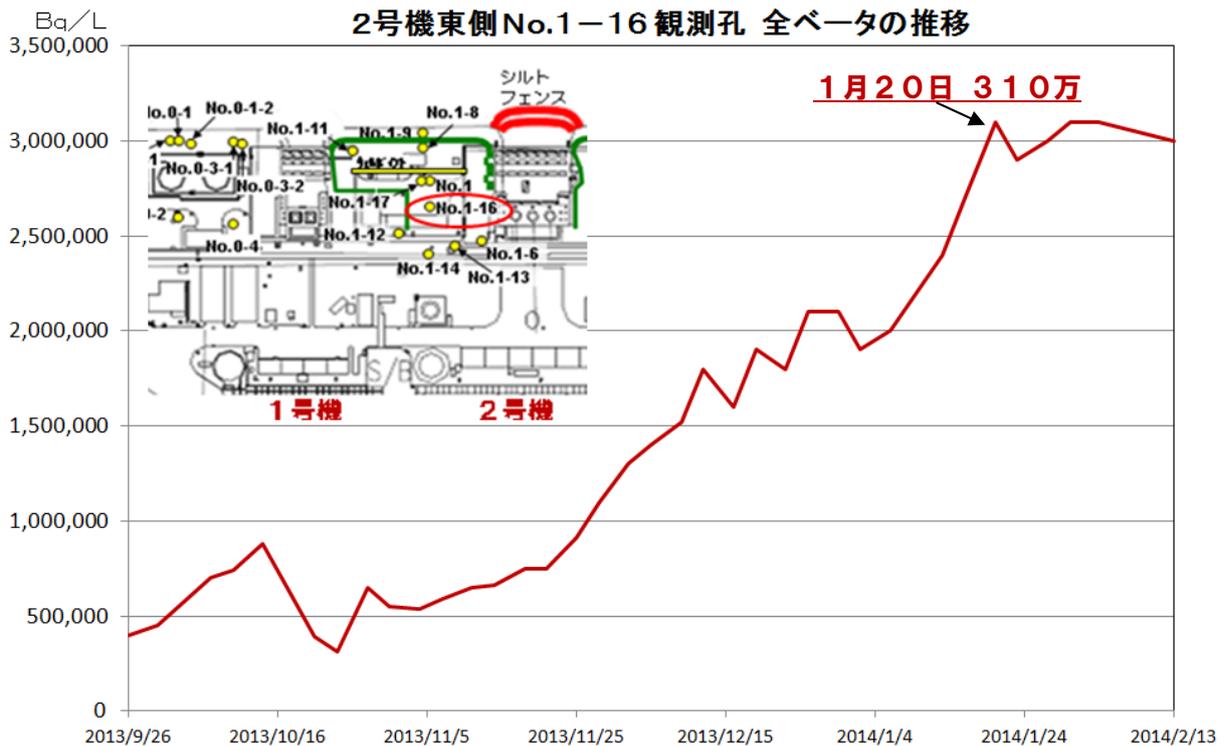


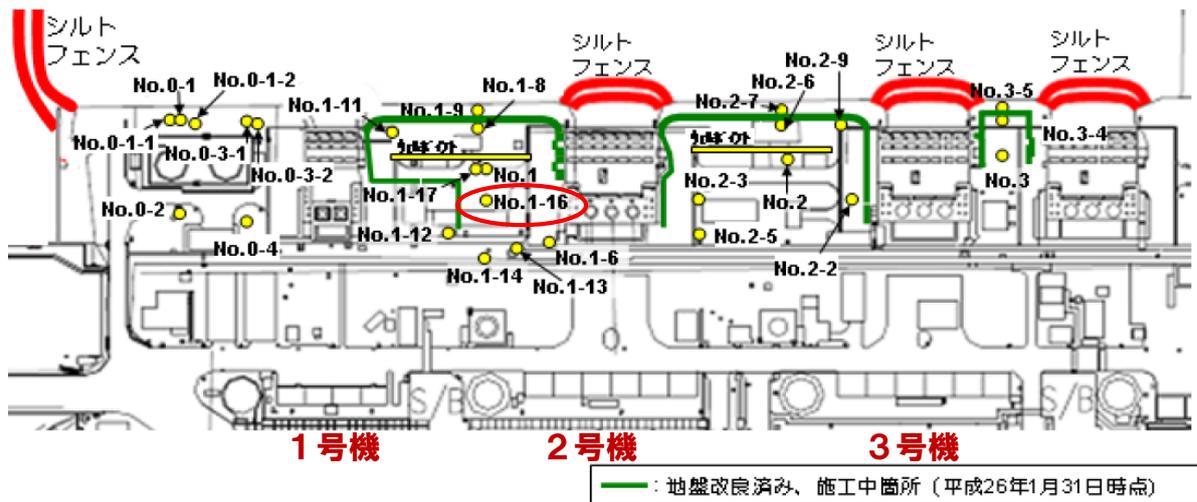
井戸の汚染水はいったん溜まっても、地下水や雨水によって絶えず薄められるはずなので、濃度は低下するはずである。10月17日の突然の上昇は、どこかのタンクで漏えいが起こったからとしか考えられない。その後も横ばいになっているのは新たな高濃度の汚染水が絶えず供給されているためであり、2月16日にまたタンクの大規模な漏れが起こったに違いない。

ところが、この重大な問題が規制委員会の特定原子力施設監視・評価検討会汚染水対策検討ワーキンググループでは議題にさえ上っていない。この会合は10月17日以降では、10月24日にもたれ、11月12日は延期になり、その後1月24日に開催されたただけであるが、この明らかなタンクからの新たな漏えいは何も検討されていない。原発の再稼働審査で大忙しなためだろうか。

## 2. 海側での漏えい

もう一つ顕著なのは、原子炉より海側（東側）での観測孔No.1-16が示す事実である。





No.1-16は昨年9月26日から測定値を公表しているが、全ベータの測定値は11月20日頃から急上昇し、今年に入ってまた一段と急上昇して300万Bq/Lのレベルに達している(前頁グラフ)。この観測孔の位置は2号機の海側であるが1号機にも近い位置にある。2号機かあるいはむしろ1号機から漏えいした汚染水がカーブを描いて流れ込んでいると考えられる。

また、東電は2月6日に、No.1-16の更に海側の位置にある井戸から昨年7月5日に汲み上げた水で、ストロンチウム90が実は500万だだったと公表した。この値を東電は「値が不自然だ」として伏せており、この水の全ベータ濃度で90万だと公表していた。ストロンチウム90は全ベータの約半分だと考えられるので、本当は全ベータは1000万あったということになる。これだけ高い濃度の汚染水が海のすぐ傍にあるということは、それだけ海が汚染されていたということにつながる。

また、2月13日付東京新聞によると、2号機の海側敷地の井戸から7万6千という放出限度の500倍以上の高濃度セシウムが検出されている。建屋からトレンチに入った汚染水が漏れたのではないかと推測されている。

### 3. まず実態を把握せよ、海への放出反対、再稼働審査より汚染水対策を優先せよ

IAEAの調査団は昨年12月4日に、「基準値を下回るものは、海への放出も含めた検討をすべきだ」と助言した。「一定の管理下での放水は世界中で行われている」というが、これだけ大量にある汚染水を薄めて海洋に流すなどとてもないことである。例えば、2002年度の1年間に日本の全原発から放出された液体中の放射能(トリチウムを除く)は23万Bqであるが、前記No.1-16のわずか1リットル中の全ベータ300万Bqはその13倍にも相当している。つまり、わずか77ccで、全原発1年分の液体放射能流出量になってしまうのだ。

それよりも今問題なのは、上記2つのグラフで示したように、タンクや建屋内から高濃度の汚染水が絶えず地面や地下水に流れ続けているということだ。この汚染水はいったいどこへ行っているのだろうか。土地の汚染、地下水の汚染を通じてどこからか海に流れ出ているに違いない。

東電の廃炉・汚染水対策推進体制は4月以降に分社化しようとしている。しかし、現在の汚染水を放置したままの実態を見ると、分社化は東電の責任逃れのためではないかと強く懸念される。

早急に、汚染水の実態を把握し公表すべきである。溶接タンクを増設してフランジ型から早急に移送し、タンクからの漏れを防ぐことは緊急の課題である。海側の漏えいをどうやって防ぐのかなど、規制委員会のワーキンググループで真剣に対策を練るべきである。原発の再稼働審査より汚染水問題を絶対に優先すべきである。